

■本書の特色

- ① 古文読解の基本演習用テキストです。
- ② 前半の各講座では、古文の典型設問パターンを一つずつとりあげ、集中的に学習し、後半の各講座では、ジャンル別の総合問題で読解演習をします。
- ③ 各講座とも、**基本演習**↓**演習1** **演習2**の流れで構成され、無理なく読解力をつけることができます。うになつていきます。
- ④ 各講座に**基本確認演習**を設け、古文読解の基礎となる知識が確認できるようになっています。

目次

第1講座	主語(動作主)をとらえる	2
第2講座	指示語の内容をとらえる	6
第3講座	会話文・引用文の指摘	10
第4講座	敬語についての問題	14
第5講座	大意・要旨・主題をとらえる	18
第6講座	物語・小説の読解	22
第7講座	随筆の読解	26
第8講座	日記・紀行文の読解	30
第9講座	評論の読解	34
第10講座	韻文の読解	38

第5 講座

大意・要旨・主題をとらえる

○読解のポイント

現代文の場合と同様に、古文においても、読解の最終目標は、大意・要旨・主題をつかむことにある。それには文を段落に区切り、そのだいたいの内容をおさえたら、次にその相互関係を考え、内容の軽重を区別し、どの段落にウエートを置いていくかを判断する。ふつうは、具体的な事実や引用などを中心にした段落よりも、抽象的な意見や感想などを述べた段落のほうに重点が置かれている。なお、筆者の中心意図を示すものとして、文中で反復される語句や叙述に注目しよう。

基本演習

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

我、その能ありと思ふとも、人にゆるされ、世に所おかるほどの身ならずして、人のしわざをほめんとせん事、いささか用意すべきものなり。

三河守知房が所詠の歌を、伊家の弁、感嘆して、「優によみ給へり」といひけるをば、知房腹立して、「詩を作る事は難きにあらず。和歌の方は、すこぶる彼には劣れり。これによりて、かくのごとくいはるる、もつとも奇怪なり。今より後、和歌をよむべからず」といひけり。優の詞も、事によりて斟酌すべきにや。これは、まされるがほめけるをだに、かくとがめけり。いはんや劣れらん身にて、褒美なかなかたはらいたかるべし。人の善をもしふべからず。いはんや、その悪をや。この心、もつとも神妙なり。

ただし、人々、遍照寺にて、「山家の秋月」といふ事をよみけり。その中に、範永朝臣、藏人たる時の歌、

住む人もなき山里の秋の夜は月の光もさびしかりけり
とあるを、くだんの懐紙の草案どもを、定頼中納言とりて、公任卿の出家して籠り居させ給ひける北山の長谷といふ所へ、見せにつかはしたりければ、範永が歌を深く感嘆して、

基本確認演習

○品詞の活用

① 次の文の傍線部の語と同じ用法のものをあとから一つ選び、記号を○で囲め。

1 夜ともいはず、昼ともいはず逃げていけり。
(大和物語)

ア 帝に奉らむとて

イ 内舎人にてありける人

ウ 病になりて

エ 死にてふせりければ

2 上は、宮の亡せ給ひけるをり、さま変へ給ひにけり。
(堤中納言物語)

ア 宮仕への本意、かならず遂げさせ奉れ

イ 人はみな春に心を寄せつめり

ウ あさましいいみじけれども、声をだにせさせ給はず

エ それより御興は入らせ給ふ

② 次の文の傍線部の語の活用をあとから選び、記号を○で囲め。

春過ぎて夏来たるらし白たへの衣干したり天

この歌の端に、「範永誰人哉。和歌得^レ其^レ体^ニ」と、自筆にて書き付けられたりけるを、範永、聞きて感にたへず、その草案を乞^ヒとりて、錦の袋に入れて、宝物として持たりけり。これこそ称美のかひありて聞ゆれ。かやうの事は、よくいたれる人のすべきなり。

(十訓抄)

〔注〕 能——才能。うてまえ。所おかるる——遠慮される。用意——心づかい。

知房——九条太政大臣信長の子。伊家の弁——内蔵頭公基の子。すこぶる——少し。やや。なかなか——かえって。いたれる人——芸術に深く達した人。

1 この文章は三つの段落から成っているが、第一段落は全文の何に当たると思うか。次から最も適当なものを選び、記号を○で囲め。

ア 主題 イ 論拠 ウ 解説 エ 概説

2 第二段落は、第一段落に対し、どういう関係にあると思うか。次から最も適当なものを選び、記号を○で囲め。

ア 一つの具体例を挙げて第一段落の趣旨をさらにくわしく述べたものである。

イ 第一段落の趣旨を、さらに次元の高い観点から説明したものである。

ウ 第一段落の趣旨に一つのエピソードを付け加えたものである。

エ 第一段落を受けて、さらに別の考えに進展するいとぐちを示したものである。

3 第三段落の趣旨を、第一段落の言い方を参考にして、現代語で五十字以内で述べよ。
(句読点は含まない)

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

の香具山 (万葉集)

ア 四段活用 イ 上二段活用

ウ 下二段活用 エ 上一段活用

オ カ行変格活用

④ (助詞)

3 次の文の傍線部の文法的用法として最も適当なものをおとから選び、() に記号で答えよ。

1 嘉祥寺僧都海恵といひける人の、いまだ若くて、病ひ大事にて、限りなりける比……

2 「大きなるさるの、あるずりの水干きたるが、たてぶみたる文をもちて来つるを……」

(今昔物語集)

ア 主格 イ 連体格

ウ 同格 エ 比喩

1 () 2 ()

4 次の文の傍線部の語の文法的説明として適当なものをおとから選び、記号を○で囲め。

「ともかくものたまはせむままとと思ひたまふるに、『見ても歎く』といふことにこそ思ひたまへわづらひぬれ」と聞こゆれば、……

(和泉式部日記)

ア 格助詞 イ 接続助詞

ウ 断定の助動詞 エ 完了の助動詞

演習1 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ、うちとけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉のほひも見え侍るめり。(①)歌はいとをかききこと。ものおぼえ、うたのことわり、まことの歌よみぎまにこそ侍らざめれ、口にまかせたることもどもに、かならずをかききし一ふしの目にとまる詠み添へ侍り。それだに、人の詠みたらむ歌、難じことわりたるは、いでやきまで心は得じ。口にいと歌の詠まるなめりとぞ見えたるすちに侍るかし。(②)恥づかしげの歌よみやとはおぼえ侍らず。(③)丹波の守の北の方をば、宮、殿などのわたりには、匡衡^{まきひら}衛門とぞいひ侍る。(④)ことにやむごとなきほどならねど、まことにゆゑゆゑしく、歌よみとて、よろづのことにつけてよみちらさねど、聞こえたるかぎりは、はかなきをりふしのことも、それこそ恥づかしき口つきに侍れ。(⑤)ややもせば、腰はなれぬばかり折れかかりたる歌をよみいで、えもいはぬよしばみごととしても、われかしに思ひたる人、にくくもいとほしくもおぼえ侍るわざなり。(⑥)清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。さばかりさかしだち、真字^{まじ}書きちらして侍るほど、よく見れば、まだいとたへぬことおほかり。(⑦)かく、人にことならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行くすゑうたてのみ侍れば、艶になりぬる人は、いとすごうすろなる折も、ものあはれにすすみ、をかききことも見すぐさぬほどに、おのづから、さるまじくあだなるさまにもなるに侍るべし。(⑧)そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよく侍らむ。(柴式部日記)

〔注〕 真字——漢字。 たへぬ——よくなし得ない。

1 この文章は三つの段落から成っている。(①)―(⑧)のどこで区切るのが最も適当か。次から選び、記号を○で囲め。

- ア ④と⑥ イ ③と⑦ ウ ⑤と⑧
エ ①と③ オ ③と⑥ カ ②と⑤

2 ……線部「歌はいとをかききこと。……侍るかし」の論旨に沿っているものを次から一つ選び、記号を○で囲め。

ア 奔放な詠みぶり、興をもよおせば、口をついて珠玉のようなことばが出て来るといふ歌人である。

イ 歌論や知識は豊かではないのだから、自己の歌について、とやかく自慢すべきではない。

ウ 感情を素直に詠むのが特色で、歌の極意に達した歌人である。

演習2 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

師の風雅に、万代不易あり、一時の変化あり。この二つにきはまり、その本一つなり。その一つといふは風雅の誠なり。

不易を知らざれば、誠に知れるにあらず。不易といふは、新古によらず、変化流行にもかかはらず、誠によく立ちたる姿なり。代々の歌人の歌を見るに、代々その変化あり。また、新古にもわたらず、今見るところ昔見しに変わらず、あはれなる歌多し。これまづ不易と心得べし。

また、千変万化するものは自然のことわりなり。変化にうつらざれば風あらたまらず。これに押しうつらずといふは、一旦の流行に口ぐせ時を得たるばかりにて、その誠を責めざるゆゑなり。責めず、心を

こらさざる者、誠の変化を知るといふことなし。ただ人にあやかりて行くのみなり。責むる者は、その地に足をすゑがたく、一步自然に進むことわりなり。行く末幾千變万化するとも、誠の変化はみな師の俳諧なり。「かりにも古人の涎をなむることなかれ。四時の押しうつるごとくものあらたまる、みなかくのごとし」ともいへり。

師末期の枕に、門人この後の風雅を問ふ。師の曰く「この道の我に出でて、百變百化す。しかれども、その境、真・草・行の三つをはなれず。その三つの中にいまだ一、二をも尽くさず」となり。生前をりをりの戯れに、「俳諧いまだ俵口をとかず」ともいひ出でられしこと度々なり。

「高く心を悟りて俗に帰るべし」との教へなり。「つねに風雅の誠を責め悟りて、今なすところ俳諧に帰るべし」といへるなり。つねに風雅にゐるものは、思ふ心の色ものとなりて、句姿定まるものなれば、取りもの自然にして子細なし。心の色うるはしからざれば、外に言葉を巧む。これすなはちつねに誠をつとめざる心の俗なり。誠をつとむるといふは、風雅に古人の心をさぐり、近くは師の心よく知るべし。その心を知らざれば、たどるに誠の道なし。その心を知るは、師の詠草の跡を追ひ、よく見知りて、すなはちわが心の筋を押し直し、ここに赴いて自得するやうに責むることを、誠をつとむるとはいふべし。

師の思ふ筋にわが心を一つになさずして、私意に師の道をよくこびて、その門を行くと心得顔にして、私の道を行くことあり。門人よく己れを押し直すべきところなり。「松のことは松にならへ、竹のことは竹にならへ」と師の言葉のありしも、私意をはなれよといふことなり。このならへといふところを己がままにとりて、つひにならざるなり。ならへといふは、ものに入りて、その微のあらはれて情感するや、句

と成るところなり。たとへ、ものあらはにいひ出でて、そのものより自然に出づる情にあらざれば、ものと我二つになりて、その情誠に至らず。私意のなす作意なり。

ただ師の心をつねに悟りて、心を高くなし、その足下に戻りて俳諧すべし。師の心をわりなくさぐれば、その色香わが心の匂ひと成りうつるなり。詮議せざれば、さぐるにまた私意あり。詮議・詮索責むる者は、しばらくも私意にはなる道あり。ただ怠らず詮議・詮索すべし。これを専用のこととして、名を「地ごしらへ」といふ。風友の中の名目とす。

〈注〉 風雅——俳諧。不易——時代の流行や好みにかかわりなく、人を感動させるような句。ことわり——道理。

1 この文章は大きく二つの部分から成っているが、前半と後半とはどこで区切るのが最も適当か。第一段落文末の五文字を書け。(句読点は含まない)

2 次のうち、この文章の趣旨に合致するものには○を、そうでないものには×をつけよ。

- (1) 俳諧の道にこころぎすものは、たとえ世間の好みにさからうことになつても師風を固守しなければならない。()
- (2) 俳諧のすばらしさはその作者自身の風雅に対する心のあり方も深く結びついている。()
- (3) 俳諧の道においては世俗的・日常的で卑近なことからは排除して、常に上品な風格を忘れてはならない。()
- (4) 俳諧の修行にとって最も大切な基礎作業は、無私の境地となり、師風の学習に精進することであり、そのほかに道はない。()

第8

講座

日記・紀行文の読解

○読解のポイント

日記文は、いうまでもなく筆者の内面の投影であり、自身の精神生活や人間としての心身の成長過程についての叙述が大半を占める。紀行文は、旅を扱ったものであるから、いわゆる5W1H（いつ、だれが、どこから・どこへ、何のために、どんなふう）をいつも確認しておく。人との触れ合いも多く語られ、いろいろな人物が登場するから、動作の主体を正しくおさえる。どちらも、感情や情緒の高まるところや場面の転換点で、よく和歌が挿入されるので、その場に応じて、歌意を的確に汲み取ろう。

基本演習

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

かばかりねんごろにかたじけなき御心ざしを、見ず知らず心こはきさまにもてなすべきこととはさしもあらずなど思へば、参りなむと思ひ立つ。まめやかなることども言ふ人もあれど、耳にもたたず、心うき身なれば、**A**にまかせてあらむと思ふにも、この宮仕へ**B**にもあらず、いはほのなかこそすまほしけれ。又うきこともあらば、いかにせむ。いと心ならぬさまにこそ思ひ言はめ。なほかくてやすきなまし。近くておやはらからの御ありさまも見きこえ、又昔のやうにも見ゆる人のうへをも見定めむと思ひ立ちにたれば、あいなし、参らむほどまでだに、びんなきこといかできこしめされじ。近くてはさりととも御覧じてむと思ひて、すきごとせし人々の文をも、「なし」など言はせて、さらに返りごととせす。宮より御文あり。見れば、「さりとともたのみけるがをこなる」など、おほくのことどもたまはせて、「いざ知らず」とばかりあるに、胸うちつぶれて、あさましうおぼゆ。めづらかなるそらごとどもいとおほく出で来れど、さはれ、なからむことはいかがせむとおぼえて過ぐしつるを、^③これはまめやかにのたまはせられたれば、思ひ立つことさへほのききつる人もあべかめりつるを、をこなるめを見るべかめるかなと思ふに悲しく、

基本確認演習

○文学史

① 次の解説は、いずれも日本文学史上有名な作家についてのものである。それぞれの解説に該当する作家を、あとから一人ずつ選び、() に記号で答えよ。

A 京都の下加茂神社の神官の家に生まれ、和歌と音楽の道に精進した。そして、和歌の才能を認められて、後鳥羽上皇の和歌所に仕える身となって、歌壇でも大いに活躍した。しかし、後に出家、遁世して、蓮胤と名のつた。

B 平安前期の歌人で、六歌仙の一人。美貌と和歌の才とをもって世に知られた。京都から東国に下った時に、隅田川の辺で、「名にし負はばいざ言問はん都鳥わが思ふ人はありやしやと」の一首を詠んだという。『古今和歌集』の序で、その歌風を、「心余りて詞足らず」と評されている。

C 室町時代の初めに現れた能の天才で、父とともに、その芸を高めて、当時の代表的存在

御返りきこえむものともおぼえず。

(和泉式部日記)

〔注〕 見ず知らず——見もしない知りもしないで。知らん顔をして。ことごと——そのほかのこと。さしもあらず——それほどでもない。昔のやうにも見ゆる人のうへ——昔の夫のように思われる子供の行く末。あいなし——つまらない。すぎことせし——言い寄ってきた。ほのききつる——いくらか耳にした。

1 A・Bに入れるのに最も適当な語を、それぞれ次から選び、()に記号で答えよ。

ア 本意 イ 来世 ウ 宿世 エ 波 オ 昔
カ 我 キ 人 ク 別 A () B ()

2 ——線①「まめやかなることども言ふ人々」とは、どういう人々か。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア 細かいことばかり言い立てる人々 イ まじめな忠告をしてくれる人々
ウ 好色めいたことを言いかけて来る人々 エ 現実的なことばかり言う人々

3 ——線②「近くては」の解釈として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア いろいろと取りざたする人たちの近くには
イ 親兄弟の近くに住んでいたなら

ウ 宮のおそば近くにお仕えることになれば

エ 昔の姿に少しでも近づいたなら

4 ——線③「これ」は具体的には何を指すか。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア 宮 イ おやはらから ウ 昔のやうにも見ゆる人
エ 御返りごと オ 宮よりの文 カ そらごと

5 この文章を二つの段落に分けるとすると、どこで切るのが最も適当か。第二段落の始めの五字を書け。

となり、能の大成者として仰がれている。『花鏡』『至花道』などの、深遠な芸能論を述べた伝書の著者としても名高い。 ()

D 近世後期の歌舞伎作者で、代表作に『東海道四谷怪談』がある。その徹底した、下層社会のリアルな描写と残酷な趣向とは、観客の喝采を博した。 ()

E 歌人・医学博士。正岡子規の門から出た伊藤左千夫に師事して、万葉調の短歌を作り、特に、写生ということを力説して、生涯の作家活動の基本とした。近代を代表する歌人として認められている。 ()

ア 若山牧水 イ 滝沢馬琴
ウ 在原業平 エ 世阿弥
オ 鴨長明 カ 鶴屋南北
キ 与謝蕪村 ク 小野小町
ケ 源実朝 コ 斎藤茂吉

② 次の作品名の読みを現代かなづかいで書け。

1 懐風藻 ()
2 夜半の寝覚 ()
3 十六夜日記 ()
4 玉勝間 ()
5 無名草子 ()
6 世間胸算用 ()

演習 1 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

廿一日、卯の時ばかりに舟出だす。みな人々の舟出づ。これを見れば、春の海に秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。おぼろげの願によりてにやあらん、風も吹かず、よき日出で来て、漕ぎゆく。このあひだに、使はれむとてつきて来る童あり。それがうたふ舟歌

なほこそ国の方は見やられる わが父母ありとしおもへば かへらや

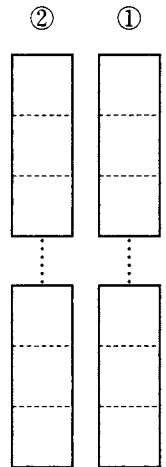
とうたふぞあはれなる。かくうたふを聞きつつ漕ぎ来るに、黒鳥といふ鳥、岩の上にあつまりをり。その岩のもとに、波白くうちよす。楫取のいふやう「黒鳥のもとに白き波をよす」とぞいふ。この言葉なにはなけれども、ものいふやうにぞ聞こえたる。人のほどにあはねば、とがむるなり。かくいひつつゆくに、舟君なる人、波を見て、「国よりはじめて、海賊むくいせむといふなることをおもふ上に、海のまた恐ろしければ、かしらもみなしらけぬ。七十ち八十ちは海にあるものなりけり。

③ わが髪かみの雪と磯いそへの白波といづれまされり沖つ島守
(土佐日記)

〈注〉 みな人々の舟——「みな」は「出づ」にかかるとみるのが通説。
楫取——船頭。 ものいふやうに——この「もの」は「興あること」との意。 沖つ島守——沖の島の番人。

1 この文章中には、光景を対照的に述べた部分が二か所（一つは二十五字以内、もう一つは十五字以内）ある。それぞれ初めと終わりの三字を抜き出して書け。（句読点は含まない）

2 線①「卯の時」とは、現在のどいたい何時ごろに当たるか。午前、午後の別を明らかにして答えよ。



3 線②「人のほどにあはねば、とがむるなり」の内容として正しいものを次から選び、記号を○で囲め。

- ア 楫取のほかは人にも会わないので、なつかしい言葉として聞きとめるのである。
 - イ 楫取のような分際で生意気な文句を並べるので非難するのである。
 - ウ 楫取とは結局身分が合わないのに、ものの言い方もとがめることになるのである。
 - エ 楫取という身分に不相応な言葉なので、妙に思っただけにとめるのである。
- 4 線③「楫取いへ」の解釈として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。
- ア 楫取よ、沖つ島守に言ってくれ。
 - イ 楫取、すなわち沖つ島守よ、言ってくれ。
 - ウ 沖つ島守も楫取も言ってくれ。
 - エ 楫取よ、沖つ島守にかわって言ってくれ。

演習2

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

いとせめてあくがる心催すにや、にはかに太秦うづまに詣でむと思ひ立ちぬるも、かつうはいと怪しく、仏の御心の内恥づかしけれど、二葉より参り慣れにしかば、すぐれて頼もしき心地して、心づからの悩ましさも愁へ聞えむとにやあらむ、暫しばしは御前に。供なる人々、「時雨しぐれしぬべし。はや帰り給へ」など言へば、心にもあらず急ぎ出づるに、法金剛院の紅葉、この頃ぞ盛りと見えていとおもしろければ、過ぎがてにおりぬ。高欄のつまなる岩の上におりぬて、山のかたを見やれば、木々の紅葉色々に見えて、松に掛かれるつたの色も、ほかには異なる心地して、いと見所多かるに、憂き故里はいと忘れぬるにや、とみにも立たれず。折りしも風さへ吹きて、もの騒がしくなりければ、見さするやうにて立つほど、

人しれず契りしなかの言の葉を風吹けとは思はざりしを

と思ひ続けるにも、すべて思ひ混することなき心の内ならむかし。

帰りてもいと苦しければ、うち休みたるほど、御文とてとり入れたるも、胸うち騒ぎて引き広げたれば、ただ今の空のあはれに日頃の意りをととり添へて、こまやかに書きなされたる墨つき、筆の流れも、いと見所あれど、例のなかなかなかき乱す心迷ひに、言の葉の続きも見えずなりぬれば、御返りもいかか聞えけむ、名残①もいと心細くて、この御文をつくづくと見るにも、日頃のつらさはみな忘れぬるも、人わろき心のほどやとまたうち置かれて、

これやさ③は問ふにつらさの数々に涙を添ふる水茎のあと

例の人しれず中道近き空にだに、ただたどしき夕闇に、契り違へぬ④しるべばかりにて、尽きせず夢の心地するにも、出で聞えむかたなけ

れば、ただ言ひしらぬ涙のみむせ返りたる。暁にもなりぬ。枕に近き鐘の音も、ただ今の命を限る心地して、我にもあらず起き別れにし袖の露、いとどかこちがましくて、「君や来し」とも思ひ分かれぬ中道に、例の頼もし人にてすべり出でぬるも、返す返す夢の心地なむしける。

(阿仏尼「うたたね」)

〔注〕 いとせめてあくがる心——ひどく思いつめて上の空になった心。いとどかこちがましくて——層愚痴っぽくなって。例の——いつもの。

1 — 線①は、何の「名残」か。具体的に説明せよ。

2 — 線②「人わろき」を口語訳せよ。

3 — 線③は、「忘れてもあるべきものをなかなかに問ふにつらさを感じ出でつる」「吹く風も問ふにつらさのまざるかな慰めかぬる秋の山里」などと用いられる表現である。これを参考にして、文章中の「問ふにつらさ」を解釈せよ。

4 — 線④「契り違へぬしるべばかりにて」の下には、どのような語句が省略されているか。簡単に口語で書け。

ら大寒までの寒中の冷水を御頭にふりかけなさいませ」と申しあげたので、水の張りつめた水をたくさんおかけになったところ、ひどくおふるえになり、御顔色もお変わりになっていらつしやつたのは、実にお気の毒で悲しいことと側近の人々も見申しあげたと伝え承つたことでした。

ご病氣のために、金液丹という薬を服用しておられたということについて、「その薬を飲んだ人は、このように目の病氣を患つものだ」などと人々は申しましたが、桓算という供奉僧（の靈）が三条院の御物の怪となつてあらわれて申しますには、「（自分が）院の御首に乗り移りとりついで、左右の羽を（院の御目に）おおいかぶせ申しているが、はばたきをして羽を動かすと、その時少しお見えになるのである」と言つたということです。

（はやくに）ご退位なさつたことも、多くは比叡山の根本中堂にお上りになつてお祈りなさろうと考えられたからなのでした。そういうことではありましたが、比叡山にお上りになつて（お祈りをなさつて）も、いっこうにそのききめがおありにならなかつたのは、まことに残念なことでした。すぐにおなおりにならなくても、少しぐらいの効果はあつてもよかつたことですよ。そんなわけで、ますます山の天狗がお惱まし申しあげるので、いろいろうわさし申しあげるのです。

演習 2 ①そのまま ②見たくて ③歌道 ④一通りでなく ⑤やはり

2 ①カ↓イ ②カ↓イ ③カ↓イ ④カ↓ア ⑤ア↓カ 3 院 4 ③

【解説】 2 敬意の判定は、(1)敬意の種類、(2)動作の主体を見極める、(3)発語者つまり、その語を用いた人がだれかを押さえる。①～④の発語者は全部作者、⑤だけがアの五条の三位入道。なかでも謙讓語である③と④の場合、その動作の及ぶ相手にも注意する。⑤の「候へ」は丁寧語だから、五条の三位入道の手紙の相手である作者への敬意。3 「賜ふ」は、与えるの尊敬語であるから、「お与えになつた人」、つまり院を指す。4 ①の「べし」は、宮内卿に歌を作らせ、作者に刺繡しゅうをさせようというのであるから、「命令」の用法。②は「当然」、④は「意志」。

【口語訳】 建仁三年の年、十一月の二十日過ぎの何日であつたか、五条の三位入道俊成が、九十歳になつたとお聞きあそばされて、後鳥羽院が長寿の祝宴を催し下さるにあたり、（俊成への）贈り物の法衣の装束の袈裟に歌を書

くようにと、師光入道の娘、宮内卿の殿に命じて歌を詠まされ、私はその歌を紫の糸で院の仰せで刺繡してさしあげた。（その歌は、）

ながらへて……生きながらえて、今朝こうしてお祝いの袈裟を頂戴するのはまことにうれしいことだ。年はとつても幾千年も長生きして幾久しくわが君にお仕えしようと思つ。

とあつたが、おさずけになる院の歌としてはもうすこし上手であるはずだと内心思つたけれども、そのまま刺繡すべきだから歌の通りに刺繡したところ、「今朝ぞ」の「ぞ」の文字、「つかへむ」の「む」の文字を、それぞれ「や」と「よ」に変えるべきであつたと、にわかにならなかつたので、それに二条殿に参上せよとの院の仰せで、のりみつの中納言の車を差し向けられたので、その車で参つて例の二文字を刺繡し直した。そしてそのまま祝賀の宴も見たくて一晩中席に控えて見ていた。私は昔このように臣下が賀宴を賜つた例を思い出して感激し、歌道にたずさわる昔の名譽を一通りでなくすばらしいことと思つたので、その翌朝入道のもとへそのことを申しやつた。

君ぞなほ……九十歳の賀を朝廷から賜つた名譽なあなたは、今日からさらに年を重ねて九十年も長生きされることでしょう。

その返事に、俊成卿は「もつたいない院よりのお召でしたから、這うようにして参上して、人目にはどんなにか見苦しかつたらうと思いましたが、このようなお祝いのことばをいただきますと、やはり昔の例についても物事の由来についても、あなたのようによく知っている人と知らぬ人とは、本当に違うものです」と書いて、

かめやまや……この私の九十歳の長寿に、蓮葉山の仙人が生きてといふ九千年の齡をそえて、わが君の御代にお譲りいたしましょう。

第 5 講座 **大意・要旨・主題をとらえる** P 18～21

基本演習

1 ア 2 ア 3 世間からその才能を確実に認められた者のみが、他人をほめることができ、また感動を与えることができる。

【解説】 1 第一段落では、人の所業をほめるのはむずかしいことだから、相手

の立場をよく考慮して、その心を傷つけないようにすべきだという一般論をさうだし、第二段落では、前段をうけて、人をほめてかえってその人の心を傷つけた具体的な事例（三河守知房の場合）をあげている。第三段落では、これとまったく反対に、人をほめて非常に感謝された具体的な事例（範永朝臣の場合）をあげて、第一段落で示された作者の意見に応じている。2 第二段落は、第一段落を受けて、具体的に「三河守知房」の話を引用して、説明したものと解される。イは「次元の高い観点から」といういい方が合わない。ウは「一つのエピソード」とあるのが軽すぎてとれない。エは「別の考えに進展する」とあるのが、適切でない。

【口語訳】 自分はその道にかけては才能があると思っても、人から認められ、世間から一目おかれるくらいの身分でもないのに、他人のしたことをほめようとすることも、少し心づかいを要するものだ。

三河守知房が詠んだ歌を、伊家の弁が感心して、「上手にお詠みになった」と言ったのを、知房が聞いて腹を立て、「漢詩を作るとはむずかしくはない。（自分は伊家にまさっているという自信はあるが）和歌のほうは少し彼より劣っている。そのためにこのようにいわれるのは、実にけしからんことだ。今後、和歌を詠むまい」と言った。上手だというほめ言葉も、事によつて加減すべきものであろう。この場合は、優っている人がほめたのでさえも、きびしく非難した。まして劣っている身で、優っている人をほめることは、かえって見苦しいであろう。人のよい点についても、かれこれいうのはよくない。まして悪い点については、かれこれいうのがよくないことはいうまでもない。この心がけが実にりっぱなのだ。

これとは別に、人々が遍照寺で「山家の秋月」ということを詠みその中に、範永朝臣が藏人の時の歌、

〈住む人も……住む人もないような山里の秋の夜は、月の光もさびしいことだなあ〉

と詠んだが、例の懐紙に書いたその草稿を、定頼中納言が受けとって、公任卿が出家してこもっておられた北山の長谷という所へ、人をやつて見せたら、公任は範永の歌に深く感心して、この歌の端に「範永とはどういふ人か。和歌はみごとを歌いぶりだ」と自筆でお書きつけになった。それを

範永が聞いて感動し、その草稿をもらい受けて、錦の袋に入れて、宝物として持っていたのだ。これこそほめたかがあると思われる。このよなことは、芸道に深く達している人のすべきことである。

【基本確認演習】 ① 1 エ（ナ変動詞の連用形活用語尾。ナ変動詞は「住ぬ」「死ぬ」の二語だけ 2 イ ② オ ③ 1 ア 2 ウ ④ イ

演習 1 1 オ 2 ア

【解説】 1 和泉式部・丹波の守の北の方・清少納言に対する批評である。三人の才能や性格について、良い点は認めはするが、その欠点については徹底的に批判している。つまり、第一段落が和泉式部について、第二段落が丹波の守の北の方について、第三段落が清少納言についての部分である。

【口語訳】 和泉式部という人とは、趣深く手紙のやりとりをしたものです。しかし、和泉には感心しない面がありますが、気軽に手紙を走り書きしたときに、その方面の才能のある人で、ちよつとした言葉のつややかな美しさも見えようです。歌は実にみごとなものです。古歌の知識や歌作の理論の点では、本当の歌人というふうではないようですが、口にまかせて詠んだ歌などに、必ず興のある一点の目にとまるものを詠みそえてあります。それほどの歌人でさえ、他人が詠んだ歌について、非難したり批評したりしているような場合は、さあそれほど歌に通じているのではないのです。口をついて自然にすらすらと歌が詠めてくるのであるらしい、と思われ

るたちの人なのですね。こちらがひげめを感じる歌人だとは思われません。丹波の守の北の方を、中宮様や殿などのあたりでは匡衡衛門といっています。格別にすぐれているというほどではありませんが、まことに重々しく、歌人だからといって、万事につけて詠み散らしはしません、世に知られているかぎりの歌は、ちよつとした折の歌でも、それこそこちらがはずかしく思う詠みぶりなのです。どうかすると、上の句と下の句が離れてしまいそうな腰折れがあった歌を詠み出して、言うに言われない気どつたことをしてまでも、自分こそ上手な歌人だと思っている人は、憎らしくも気の毒にも思われるものです。清少納言は、得意顔をしていて偉そうにしていた人ですよ。あれほど利口そうにふるまって、漢字を書きちらしております程度も、よく見ると、まだあまりよくなし得ないことがたくさん

あります。このように、他人と違った特色を出そうと望んでいる人は、必ず見劣りがして、将来は悪くなるばかりですから、いつも風流ぶっている人は、ひどく寂しく何としない折でも、しみじみと感動しているようにむやみにふるまい、興あることも見のがさないようにしているうちに、自然に、感心しない軽薄な態度にもなるのでしよう。その軽薄になつてしまった人の終わりが、どうしてよいことがありますか、よいはずはありません。

【演習】 2 1と度々なり 2(1)× (2)× (3)× (4)○

【解説】 1前半は「不易」とは何か、その理念の根本を説いている。特に、臨終の床での師の言葉は、俳諧の本質をついている。後半は風雅の誠をきわめることの意義と、そのさまたげになる私意(私心)との関わりを述べている。標語「地ごしらへ」の意味をしっかりとらえよう。 2(1)は前半の、

(2)は後半の主旨とまったく逆。(3)は後半冒頭の「風雅の誠を……一体になるようにせよ」の教えに反する。(4)は、いわば全文の主旨。

【口語訳】 師の俳諧に、「万代不易」というものがあり、「一時の変化」という理念がある。この二つの理念に尽きるが、その根本は一つである。その一つというのは「風雅の誠」である。

不易ということ知らなければ、真に(師の俳諧を)理解したことにならない。不易というのは、新しい古いによらず、変化流行にかかわらず、風雅の誠に立脚した姿である。代々の歌人の歌を見ると、その時々につれて歌風の変化がある。また、新古にかかりなく、今の人が見る所と昔の人が見た所と変わらず、しみじみと胸を打つ歌も多い。これらをまず不易と心得るのがよい。

また、(万物が)千変万化するの自然の理法である。(そのように)俳諧も変化を求めなければ俳風も新しくならない。新しい俳風が変わってゆかないというのは、一時の流行に詠みぐせが合ったことに満足しているだけで、その風雅の誠を求める努力を怠っているからである。誠を求めず、心をこらすことを努力しない者は、誠に基づく変化を知ることがない。ただ人につき従って行くだけである。(これに反して)誠を求める者は、同じ場に止まることに満足できないで、一步自然に前へ進むことにな

るわけである。今後(の俳風が)どれほど変化するとしても、誠に基づく変化は、みな師の志す俳諧である。「かりにも古人の模倣に終わってはならない。四季が移り変わるように万物は変化するもので、みな(俳諧も)このようなものである」とも師はいわれた。

師の臨終の枕許で、門人たちは今後の俳風を尋ねる。師は「この道に私が入ってから、(俳風は)さまざまに変化する。しかし、その俳境は、真・草・行の三体を離れていない。(私は)その三つのうちいまだ一つ二つをも究めつくしていない」といわれた。また生前折々の冗談に、「私の俳諧はまだ俵口を解いていない」ともいい出されたことがたびたびである。

「風雅の誠を心高く悟つて俗な世間に目を向ければ俳境はひらけてくる」との教えである。(つまり)「つねに風雅の誠を求めて、日常生活そのものが俳諧と一体になるようにせよ」ということである。つねに俳諧に心を用いている者は、内なる情と外なるものが一体となって句姿が定まるから対象はありのままとらえられ私意を加えたものとはならない。心が純粹でない(私意がはたらくので)言葉をたくみに飾ろうとする。これはつねに風雅の誠を求めない心の俗によるものである。風雅の誠を求めるといふのは、風雅に(すぐれた)古人の心を探り、近くは師の心をよく学び知ることである。(古人や師の心を)理解できないと、(風雅の誠を)知るてではない。その心を理解するには、師の作品を調べ、よく味わった上で、自分の心を正しく直し、師の心にまでたどりつき自分で体得するように努力することを、誠を求めるといふのである。

師の考えの方向に自分の心を一致させないで、自己流に師の道を(理解しえた)よろこび、師の門人であると得意顔をし、勝手な道を進むことがある。門人たる者はよく自分(のかたより)を是正すべきである。「松のことは松に習え、竹のことは竹に習え」と師がいわれたことも、私心を捨てよということである。この「習え」ということを自己流に受け取るために、ついに習うことなく終わるのである。この「習え」というのは、物の中へ入り、物の本質に触れるや作者の感動が生起し、それが句の実体となるのである。たとえ、その物をあらわに表現しても、そのものから自然に出て来る感動でないと、物と自己とが二つに別れて、その感動も真実のも

ている。作者の、常により美しいもの、より優れたものを求める感覚が見られる。

1 「手」には、手、指、筆跡、演奏の仕方、(刀・矢の)傷、方法、軍下などの、いろいろな意味がある。2 「らうたげに」は、形容動詞「労たげ」の連用形で、かわいらしい、いとおしいの意。

【口語訳】

男は、めったにない、不思議な気持を持ったものではある。たいそう美しい女を捨てて、醜い女を妻に持っているのも不思議なことである。朝廷に出入りする男や、その一族の方などは、数ある女のうちでも、美しい女を選んで愛されるのがよい。とうてい及びそうにもない高貴な身分の女でも、すばらしいと思う人を、死ぬほど愛するのがよい。名のある人の娘や、まだ見たことのない人なども、すばらしいというわさを聞くほどの人を、何とかして(妻にしたい)と思うものである。一方、女が見てもよくないと思う人を(男が)愛するのは、どういう事なのだろうか。

容貌が大変すぐれ、心ばえも立派な人が、字も美しく書き、歌も趣深く詠んで、うらみごとを言い寄こしなどを、(男は)返事はうまくするが、寄り付かないで、(女が)いじらしげに嘆いているのを、見捨てて(よその女のもとへ)行ったりするのは、あきれて、他人のことであつても腹が立ち、第三者の気持としてもわびしく見えるはずだけれど、(男は)自分のしたことについては、少しも相手への気づかないなど意識しないことであるよ。

【演習】

2 ①イ ②イ ④エ ⑤エ 2 ③イ 4イ 5ウ 6エ・オ

【解説】 1 ①「世には従はん」の「ん(む)」は、婉曲用法。「従ふ」は、従う、伴う、順応するなど、②「機嫌」は、世の人がそしりきらうこと、時機、気分など、⑤「気」は、大気・空気、ようす、心のはたらき・氣勢、心などの意がある。2 品詞を考えてみる。②だけ形容詞で、そのほかは助動詞。3 「生・住・異・滅」は、仏教用語で、ものが、生じ、とどまり、変化し、滅することをいう。4 「真」は宗教上、「俗」は世俗上のこと。

6 前段の要旨としてエ、後段の要旨としてオを選ぶ。

【口語訳】

世間に順応する人は、まず時機を知らなければならぬ。順序のよくないことは、聞く人の耳にもさからぬ、心にも反して、そのことは成就

しない。(だから)そのような時機をわきまをえなければならぬ。ただし、病気にかかること、子を産むこと、死ぬことだけは、時機を考慮せず、順序がよくないからといってとどまることはない。生じ、とどまり、変化し、滅するという、人生の移り変わりの、真の大事は、水勢の激しい川がほとばしり流れるようなものだ。ほんの少しの間も停滞することなく、どんな実現してゆくものだ。だから、出世間のことでも俗世間のことでも、必ずやりとげようと思うようなことは、時機をとやかく言うべきではない。あれこれと準備することなく、足踏みをしてはならないのである。

春が暮れて後に夏になり、夏が終わってから秋が来るのではない。春はそのまま夏になろうとする気配を含んでおり、夏のうちからすでに秋の気配は通っており、秋はそのまま寒くなり、十月は小春日和で、草も青くなつて梅もつばみをもつようになる。木の葉が落ちるのも、まず葉が落ちて(そのあとで)新芽が出てくるのではない。木の内部からきざし芽ぐんでくる勢いにたえられなくて落ちるのである。(新芽がもえたすのを)迎える気配を、内部に準備してあるから、待ち受けて交替する順序が非常に速い。(しかし)生・老・病・死のめぐりくることは、またこれ以上に迅速だ。四季はそれでも決まった順序がある。(しかし)死期には定まった順序がない。死は前からくるとは限らず、いつのまにか後ろに迫っている。人はみな死のあることを知りながら、しかも予期することが切迫していない状態のときに、(死は)突然やってくる。(それはちょうど)沖まで一面に干潟になつていても、(思いがけなく)浜辺の方から潮が満ちてくるようなものだ。

第8 講座

日記・紀行文の読解

P 30 ~ 33

【基本演習】

1 Aウ Bア 2 イ 3 ウ 4 オ 5 宮より御文

【解説】

筆者の心的状況が十分に把握されていなくては、設問への解答もむずかしい。この文章は、心中思索が多い文章で、しかも、会話部と違つて、「」では示されないで、まず、この心中思索部を順にとらえてみると、「かばかりねんごろに……さしもあらず」参りなむ「心うき身なれば……

まかせてあらむ」「いはほのなかこそ……見定めむ」「あいなし……御覧じてむ」「きはれ……いかがせむ」「思い立つことさへ……見るべかめるかな」となる。

1 前半の心中思索部から、作者は、自分を「心うき身」と思っていて、宮の邸にあがることも、出家することも、すべては運命で、なるようにしかならないと考えていることがわかる。宮仕えについては、「いはほのなかこそすまほしけれ」と言いたくなるほどの気持ちをもっている。それはつまり、否定的である。 3 「近くて、おやはらからの御ありさまも見えこえ」という叙述が、前にある。この「近くて」は、「おやはらから」に、である。ここでは、何に「近くては」が示されていないが、「さりとも御覧じてむ」という尊敬語の使用からも、宮に「近くては」、の意と判断する。

【口語訳】 これほど手厚くもつたない宮のお気持ち、知らん顔をしてつれない様子で振る舞ってよいだろうか。そのほかのことはたいしたことはないなどと思うので、(宮の邸へ)上がろうと決心した。まじめな忠告などを言ってくれる人々もいるが、耳にもとまらない。(私は)いとわしい身なので、前世の縁のままにまかせようと思うにつけても、この宮仕えはかねてからの希望ではない。(浮世を離れて)巖の中に住みたいものだ。しかし(浮世を離れた)生活につらいことでもあったら、どうしよう。(浮世を離れたのは)本心ではないと(人々は)思いもし言いもするだろう。やはりこのまま(浮世を離れないで)過ごそうか。親や姉妹の近くでご様子を見申し上げ、また昔の夫のように思われる子供の行く末を見届けたいと思ひ決めたので、つまらない、(宮の邸へ)上がる間だけでも、不都合なうわさをなんとかして(宮に)お聞かせしたくない。(宮の)近くにお仕えすれば、いくら不都合なうわさが立っていても(真実のほどは)おわかりになろうと思つて、言い寄ってきた男たちの手紙にも、「不在です」などと(侍女に)言わせて、全く返事も出さない。宮からお手紙があった。見ると、「いくらなんでも(あなたに関する)うわさは真実ではない」と信じていた私がばかでした」などと、多くの言葉をもお書きにならないで、「人はともかく(私は)浮き名が立つのを惜しむから、あなたのことは)知らない(と言おう)」とだけ書いてあるので、胸がつぶれるくらい驚いて、あきれたことだと思

つた。普通とは違った作り話(うわさ)などもないそう多く出てきたけれど、たとえそうだとしても、ないことはどうしようもないと思つて過ごしてきたのに、宮のお手紙は本気でおっしゃっているの、(私が宮の邸へ上がることを)決心したことまでいくらか耳にした人もいるだろうに、(こうなつては)ばかな目を見ることになりそうだなあと思つと悲しくて、(宮へ)ご返事を差し上げる気持ちにもなれない。

【基本確認演習】 ① Aオ Bウ Cエ Dカ Eコ ② 1かいふうそう 2よわのねざめ 3 いざよいにつき 4 たまかつま 5 むみようぞうし 6 せけんむなざんよう

演習 1 ①春の海：りける ②黒鳥の：をよす 2 午前六時ごろ 3 エ

4 エ

【解説】 1 「対照的」に注目し、対照されている二つのものを的確につかむことが必要。 3 「とがむ」は、非難するの意ではない。「人のほどにあはねば」というのが理由を表している。つまり、いぶかしく思う、気にとめる意である。

【口語訳】 二十一日、午前六時ごろに舟を出す。一行の人々の舟もみんな出帆する。この光景を見ると、静かな春の海に、秋の木の葉が散っているようだった。なみなみならぬ祈願によってであろうか、風も吹かず、よい日和になってきて、舟を漕いでゆく。このようにしているうちに、召し使われようとして、土佐の国からついて来た少年がいる。その少年がうたう舟唄、○やっぱり故郷の方がながめられてならない。わが父母がそこにいるのだと思うので。帰ろうよ。

とうたうのが、しみじみと胸にこたえる。その子がこのようにうたうのを聞き聞かして漕いでくると、黒鳥という鳥が、岩の上に集まっている。その岩の下に波が白くうち寄せせる。船頭が言うには、「黒い鳥の下に、白い波がうち寄せる」という。この言葉は何というわけではないが、風流なことを言うように聞こえたのである。それは船頭という身のほどに似合わないから、特別に耳にとまるのである。このように言い言い漕いでゆくうちに、舟のかしらである人(貫之)が波を見て、「土佐の国を船出した時からずっと、海賊がしかえしをするだろう」という噂があることを心配するうえに、

海がまた恐ろしいので、その心配のために頭がすっかり白くなってしまった。これを見ると、七十・八十という老齡は、海にあるものだったなあ。

○私の髪の毛の雪のような白さと、海岸に打ちよせる白波と、どちらが白いか、沖の島守よ。

船頭よ、かわりに答えよ」

演習2 1 愛人からの手紙に、夢中で返事を書いて使いの者にとどけさせた気持ちの名残。 2 人に知られたらはずかしくなるような 3 なまじっか慰問されることによつて、かえつて思い出される恨めしさ。 4 いらっしやつた。

【解説】 1 直前に「御返りもいかが聞えけむ」とあるから、とにかくも返事を出したあとに尾を引く気持ち。 3 参考を示された歌によつて「問ふに」を「問われて(かえつて)」の意とつかむ。 4 傍線部は、男の来訪を記した部分。「約束を違えないというあかしだけのように(あの人はいらっしやつた)」となる。

【口語訳】 ひどく思いつめて上の空になった心がそうさせたのであろうか、急に大秦(「広隆寺」)にお参りしようと思ひ立ったのも、一面からすればたいそう異常で、仏の心のうちを思うと恥ずかしいけれど、他面、幼いころからお参りしなれてきたので、格段に頼みになる気がして、われとわが心の煩いをも嘆き訴え申し上げようと思つたのであろうか、しばらくは(仏の)御前でお祈りしていた。供の人々が「きつと時雨になるでしょう。早くお帰り下さい」など言うので、心ならず急いで退出したが、(途中の)法金剛院の紅葉が、今しも盛りと見えてまことに見事なので、通り過ぎがたく(車を)降りた。(院の)高欄の端にある岩の上に降りて座つて、山の方を見やると、木々の紅葉が、色とりどりに見え、松にかかっている鶯の色も、よそとは違つている感じがして、たいそう見どころが多いので、憂鬱なわが長年の住まいのことはなおさら自然と忘れてしまつたのか、急いで立つ気も起こらない。しかしちよつどその折風まで吹いて、あわただしい雰囲気になつたので、見るのを中途でやめたような形で立つときに、

人しれず……人しれず(あの人と)約束した愛の言葉を風が吹き散らせなどとは願ひもしなかつたのに。

と思ひ続けるにつけても、万事他のことなど入りこむ余地のない、ひたむきのわが心のうちのようにあつた。

帰宅してもどうしようもなくひどくつらいので、ちよつと横になつていると、(あの人からの)お手紙といつて(侍女が)とり入れたが、そんなことにも胸がどきどきして(手紙を)引き広げてみると、ただいまの空模様(の趣深さに)日ごろの無沙汰(の挨拶)を添えて、心こまやかに書かれてある墨の色、筆の運びも、まことに見どころがあるが、いつものように、かえつて千々に乱れる心の動揺に、書かれた言葉の脈絡もわからなくなつてしまつたので、ご返事もどのように申し上げたことやら、ご返事をお出ししたあとの気持ちもまことに心細くて、(改めて)このお手紙をつらつら見るにつけ、(あの人)の冷たさに対する日ごろの恨めしさはみんないつのまにか忘れられてしまうのも、人に知られたら恥ずかしくなるような心の腑甲斐なさよと、またお手紙を知らず知らず下に置いて、

これやさし……それではこれが、あの「問ふにつらさ(慰問サレテカエツテ思ひ出サレル恨メシサ)」なのか、なまじっかやさしく問われたので、かえつて恨めしさが数多く思い出され、涙の添いまさるお手紙であることよ。

いつもの、遠くもない、人知れぬ恋の通い路の空でさえ暗くぼんやりとおぼつかない夕闇のころに、約束を違えないというあかしだけのように(あの人)いらっしやつた。どこまでも夢のような心地がするにつけても、(今までの恨めしさを)言葉に出して申し上げるすべもないので、ただ何とも言いようなく悲しい涙にむせ返つてばかりいた。暁になつてしまつた枕もと近く聞こえる鐘の音も、今生の命の終わりを告げるような心地がして、現実のわが身でもないような状態で起きて別れたが、その別れを悲しむ袖の涙の露も、一層愚痴っぽく、(伊勢物語の)「君や来し」の歌のように(本当にあの人が来たのか、私の方があこがれ出たのか、夢だったのか、現実だったのかもわからず)茫然としている中を、(あの人)いつものようにまたの逢瀬を約束して通い路を帰つていつてしまつたのも、かえすがえす夢のような心地がしたことだつた。